

おかげ  
さまで

## 日之影新聞

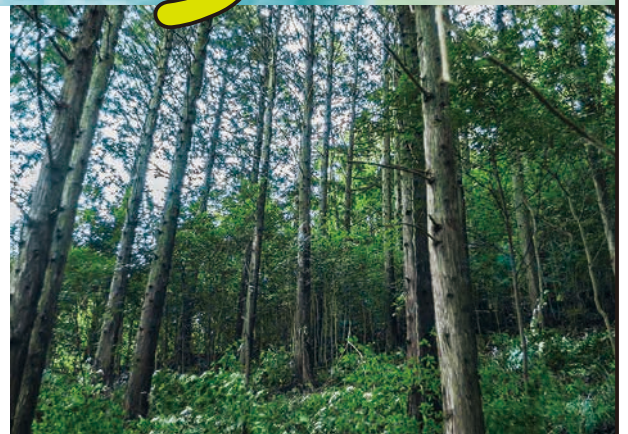
第8号

希望  
あるところ

## 太陽みたいな明るさで

今回のテーマは「若いチカラ」。以前、日之影商店街の特集でご登場いただいたおじいちゃんたちお婆あちゃんたちは、その笑顔に刻まれたシワまでもが愛おしいほど素敵だったけれども、そこから一転、今回はシワの溝も浅く、艶のある肌からキラキラとした汗が滴り落ちるような若ものたちに会いに行く。かれらは20代半ばから30代前半の年頃の青年で、進学や修行のために一度は日之影を離れたものの、今はまたこのまちに戻って暮らしている。よなよな集う酒場「ひろせや」で、そしてまたそれぞれの職場で話を聞いた。彼らは共通して、あつけらかな

と突き抜けたような明るさをまとっていた。肩肘張った力みもなく、将来の不安に怯えるフシもなく、かといってノーテンキでもなく、いい意味でムリがなく、自然体でありのままという感じがした。そしてそれはとてもいいことのように思えた。人口減少だの少子高齢化だの、手垢にまみれた暗いキーワードなんて地方の暮らしにはゴマンとある。ネガティブな言葉をいっばい並べてネガティブな気持ちになってもしょうがない。でも、彼らはなぜ日之影のまちに戻り、どんな未来を描いているんだろう。彼らの歩む先に明るい世界がある気がして。



# 夢も楽しみも日々のなかにある

抜屋匠さんの希望は「林業」のなかにあった。日之影に戻るまえに基礎を学んだ京都で目にしたものは、森の木々が、枝葉も根っこもすべてバイオマス燃料をはじめとする自然エネルギーとして活用され地域経済を豊かにしていく可能性だった。また、木を伐り、木を植え、森の保全に尽くすことは先祖からの恩恵を受け取ることであり、また次代に繋ぐことでもあり、地域の土壌を安全に保つことでもある。まして日之影は地域の90%以上を森が占める。林業をゆたかにすることがまちのゆたかさになる。そのために、林業のことを特に若い人たちにもっと知ってもらいたいと願う。

高橋一彰さんの楽しみは「酒とカラオケ」にある。ひとと一緒にあって盛り上がり、ひとを楽しませることに大きな喜びがある。大分の飲食店で10年以上、料理や接客の仕事に励みながら身につけたことかもしれない。日之影に帰ってきて半年が過ぎ、家業である書店の仕事に就いた今は、覚えなければならぬ業務が山のようにある。とはいえ、いつも「楽しむ」ことは忘れずにいたい。気のおけない仲間が日之影に帰ってきたら、いつもの「ひろせや」へ行き



抜屋匠（ぬきやしょう）／家業である林業に従事する27歳。日之影の山の奥にて、伐っているのは人工のヒノキ。「山は本来、宝物なんです。昔の人は苗を背負って山奥にまで入り、植林していたんです。未来の人のためにやってくれていたんです」と語ってくれた。

旨いものを食い、酒を飲み盛りあがる。しっかりと楽しむ、ということに本気なのだ。

佐藤将仁さんの興味は「まちづくり」にある。大学院を出るとき、スポーツ社会学の研究者として残る道も、スポーツイベントの会社に就職する道も、父が経営する居酒屋を継ぐ道もあったけれど、選んだのはいちばんやりたかったまちづくりに関わることで

できる町役場だった。この仕事に就いて2年。移住人口を増やすための政策にはどんなものがありうるのか、考えたり学んだり必死だ。大学の研究テーマでもあったスポーツによるコミュニティ形成というアプローチも有効かもしれない。ボルダリング、クライミング、リパートレッキングを楽しみむ人たちにとって日之影の自然は、これ以上はないというくらい最高のフィールドなのだ。

小林哲也さんの夢は「菓子店」に実を結んでいた。高校を出て日之影を離れ、大阪の洋菓子専門学校に学



佐藤将仁（さとう まさと）／町役場の地域振興課に勤める27歳。大学では陸上をやりつつ、スポーツ社会学を専攻。スポーツによるまちづくりの可能性を探ってきた。

び、大阪のケーキ専門店3年、福岡で3年の修行時代を経て日之影に戻った。「いつかは自分の店を」と胸に抱いていた夢は、予想より早いタイミングで実現のときを迎えた。国道218号沿いの平底トンネル近くに小さな店「パティスリー・フオレスト」をオープンさせたのは2年前。仕入れから製造そして接客と販売、すべてをたったひとりで行う、まちで唯一の洋菓子店。まちの特産品である果実やお茶や栗や季節のものを添え、品揃えも日々変わる。菓子のおいしさで地域のひとを笑顔にしていく仕事だ。



高橋一彰（たかはしかずあき）／家業である書店で働く30歳。延岡、高千穂まで幅広い営業エリアを有するまちの元気な書店で働き出したばかり。楽しみは、歩いて1分の居酒屋「ひろせや」に行くこと。



# 明るいイメージを描ける若さ

可能性として。もしかしたら日之影のまちのひとの数は減るかもしれないし、まちが少しスカスカした感じになってしまいうこともありうるかもしれない。あるひとはそれをまちの「衰退」と呼ぶかもしれない。けれど、もし本当に人口が減ったり、それまでうまく行っていたような仕組みが成り立たなくなる可能性がでてきたとしても、それを「衰退」と意味づけるかどうかはまた別の話だ。

地方消滅、限界集落。そんな言葉が暗示する薄暗い世界の向こうにだって、ひとは明るい未来をイメージすることが可能だ。「イメージできたことはたいてい実現できる」という有名な説もあるくらい、明るいイメージを持つことは大事だ。日之影の青年たちが語ってくれたそれぞれの等身大の希望や夢は、そのイメージのままに現実になっていくだろう。まちにとって大切なことは、これまでの延長線上でものこを成り立たせようとする以上に、明るいイメージネーションを起動させ、クリエイティブイデオロギイで実現させていくことだ。イマジネーションとクリエイティブイデオロギイに人口の規模は関係ない。従来とは全くちがうやり方を編み出すことも、多様な価値観を生み出し育ていくことも可能だ。それは衰退ど

ころかイノベーションとも呼ばれるものだ。

大事なのは若さだ。新しいイメージを失うとき、ひとは本物のジジババになるといふ。明るい未来を描く限り、そこに繋がる道はできていく。日之影はこれから若くあらねばならない。今回出会った彼らのような若い人たちが増えていったらいいのだ。

うし、このまちにいま暮らしている一人ひとりも若さを失ってはならないだろう。日之影とは「日の光の射すところ」だと、かつて町長さんが教えてくれたけど、ここに日の光が降り注ぐイメージを、このまちの名前はいつだって私たちに教えてくれている。希望あるところ、それが日之影なのだ。

うし、このまちにいま暮らしている一人ひとりも若さを失ってはならないだろう。日之影とは「日の光の射すところ」だと、かつて町長さんが教えてくれたけど、ここに日の光が降り注ぐイメージを、このまちの名前はいつだって私たちに教えてくれている。希望あるところ、それが日之影なのだ。



小林哲也（こばやしてつや）／菓子職人、32歳。高校卒業後、大阪の菓子専門学校へ。その後、菓子店で修行を積み、日之影で起業。製造から販売まですべてをたったひとりでやっている。



# 日之影 取材日記

「8月23日 高橋書店にて」



日之影新聞取材班を町内アテンド。3日間取材に同行させてもらった。そして自分も取材を受けた。なんだか照れくさかった。1日目の夜、ひろせやでのこと。ご近所若者メンバー6人が集合。仕事のこと、プライベートなこと、いろんなことをインタビューしてもらった。お酒の席での取材はなかなかおもしろい。酔っ払った様子が、という訳ではなく、普段接する中で聞くことのない、仕事や人生観についてのまじめな話を、まじめな顔をして熱弁している様子が新鮮で、とてもおもしろかった。みんな日之影に何かしらの可能性を感じて、そして、使命感をもって戻ってきたらしい。みんなが近い将来の夢を語っているのを見て、すごくわくわくした。楽しい取材だった。

地域振興課 佐藤将仁

# 使える かなこの 日之影方言教室



## 上級編「農作業」

十月に入ったら、どっこそっこで米刈をしよらすかね。うち方は、とうごうは世話ねくとよ。十月末に人に頼じ、コンバインで刈ってもらもち、乾燥までしてもらうき。じゃけんどん、もち米はちびくつとばかししか、作っちゃうらんき、バインダーで刈って、掛け干しせんと、てにやわんとよ。

な、くんづいてのこつじゃき、思わん骨折るとよね。刈ってしもたら、こんだ掛けかたよ。うちん人が掛け竿を組むき、それにひとつつ掛けるよ。うち方のもち米は匂いもちじゃもんじゃき、藁がなげくとよ。竿を低うしちよくと、ずそびるもんじゃき、竿を高う組まるとよ。じゃけんどん、うちへんな、こもうしちよるき、伸び上がらんといかんとよ。これまた、骨折るがね。あけん日の、腕やら腰やら、どっこそっこの痛てこつちや。脚はすくれちしもちよるがね。

（訳）十月に入ったら、あちらこちらで稲刈をされています。私の家は、米はまだ大丈夫なんです。十月末に人にお願ひして、コンバインで収穫してもらい、乾燥までしてもらいます。ですが、もち米は少ししか作らないので、バインダーで刈って、掛け干ししないといけないのです。

夫がバインダーを操作するので、私は端の方を刈ります。バインダーが旋回しやすいうように、田んぼの四つ角を手作業で刈って、バインダーが刈り残した稲を手作業で刈って、倒れている稲を、刈りやすいように起こして、手作業で刈った稲を「藁縛」で束ねたりします。大した作業ではないのですが、全部、姿勢を低くし、下をむいての作業です。意外と大変です。刈り終わったら、今度は竿に掛けます。夫が掛け竿を組むので、その竿に一束ずつ掛けるのです。私の家のもち米は、匂いもち、昔ながらの品種で香りの良いもち米です。穂が長いので、竿を低く組んでいると、穂が地面についてしまうので、夫は、竿を高く組みます。ですが、私は背が低いので、背伸びして掛けないといけません。この作業がまた、大変なんです。次の日は、腕や腰や、いたる所が痛いです。脚はパンパンに張って重い状態です。さて、二週間後は脱穀作業です。収穫までの作業が一つ一つ終わっていくと、ホッとします!!

# 活動報告 地域おこし協力隊が行く!

こんにちは！日之影町地域おこし協力隊の新作可奈子（しんたくかなこ）です。今年の3月に東京の大学を卒業し、地域おこし協力隊として日之影町に移住してきました。まだまだ日之影町について勉強している最中です。

そんな中で、私は最近「日之影町の人」というコラム記事を書かせてもらっています。日之影町の様々な場所を働いている人にインタビューをして、お話を聞かせてもらい、それを記事にしてSNSで発信するという企画です。最近日之影町の代表的なお土産品である「ゆずこ」等を作られています。

日之影町は深谷の町で、標高も場所によってばらばらだから、人が生活しやすいい地形とは言えないけれど、その分、希少な食べ物や動物、美しい風景など、多くの財産が生まれています。そ



る押方果樹園さんにおじやましました！ゆず畑を見に行かせてもらったのですが、全て急な斜面にゆずの木が生えているので非常に収穫しにくいだろうなと思いましたが、それでも、「この斜面に生えているからこそ香りが強く引き締まった柚子ができるんだ」と言われて、地形によってメリツトもデメリツトもあるんだなあと思いました。

私は、そんなかっこいい町民の姿を写真や文章で世界中に発信していきたいなと思っています。

## 今月のおかげさま



おかげさまで、84歳

毎週土日に日之影観光案内所に通っています。みんなと集まって、お茶飲んで、おしゃべりするのが何よりの生きがいです。日之影にお越しの際は、ぜひ観光案内所にお立ち寄りください。おばちゃん達が待ちますよ！

けいこ(84さい)



おかげさまで、日之影。

発行：日之影町〒882-0402 宮崎県西臼杵郡日之影町大字岩井川3399番地1 / ☎09982-8713900（代表）企画：株式会社オスマビジュアル（編集：菅原良美 総編集：アートディレクション）&写真：小坂橋基希（akaon）/デザイン：難波知子（akaon）/取材・文：空豆みきお（akaon）一禁：無断転載 | @hinagata. All Rights Reserved.